

「て形」の作り方*

—「辞書形」中心派、「ます形」中心派に欠けている視点—

藤村 泰司

国際大学

要旨

日本語教育で一般に「て形」とよばれる形をどのように導入するのか、もっと具体的に言えば「辞書形」を基にその形を導入するのか、それとも「ます形」を基にするのか、議論が分かれるところである。本稿では「ます形」中心派の立場を批判する形で書かれた、「辞書形」中心派の菊池(1999)を検討し、その結論には賛成しながらも、大事な視点、つまり「て形」は「辞書形」同様「普通動詞」の一変化形であるが、「ます形」は「丁寧動詞」の一変化形であるという視点が欠けていることが指摘された。

キーワード: 「て形」、「ます形」、「辞書形」、動詞分類判別法、「普通動詞」、「丁寧動詞」

0. 日本語の動詞は、意味や用法の違いによって様々な形で現れる。従って、そのそれぞれの形をどのように導入するかは、日本語教師(とりわけ日本語教科書作成者)にとっては重要な問題である。残念ながら、この問題について過去10年以内に出版された教科書だけを見ても、いまだ教師間に意見の一致がみられていないようである^{注1}。本稿では、動詞の様々な形の中から一般に「て形」とよばれている形を取りあげ、それがどのように導入されるかを、特にその形の導入のしかたを中心に観察・検討し、それについて私見を述べてみたいと思う。

1. 日本語教育で用いられる教科書には作成者のとる立場によっていろいろな種類があるが、その本文で使用される会話文や例文は「です/ます」体(丁寧体)で書かれているのが普通である。よって学習者が初めに接する動詞の形は、丁寧体の基をなす「ます形」(たとえば「食べます」)であって、「辞書形」と呼ばれる「食べる」のような形ではない。

では、「食べて」のような「て形」の形は、どのように導入されるのであろうか。そのしかたには、大きく分けて、次の二種類が見られる。

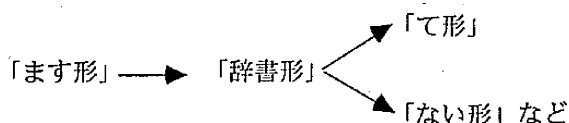
(1) a. 「辞書形」中心派

b. 「ます形」中心派

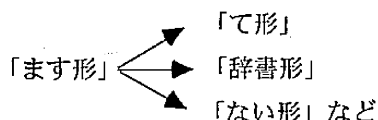
「辞書形」中心派は、まず「ます形」の次に「辞書形」を導入し、この「辞書形」を基本にして「て形」を含む他の様々な形(たとえば「ない形(否定形)」など)を導入する立場のグループである。一方「ます形」中心派は、「て形」を含む他の様々な形をすべて「ます形」から導入する立場をとるグループである^{注2}。両者の違いを図式的に記せば、次ようになる

であろう。

(2) a. 「辞書形」中心派:



b. 「ます形」中心派:



「辞書形」中心派の教科書には、筑波大学のSituational Functional Japanese (1991)、国際基督教大学のJapanese for College Students (1996)などがある。これに対して、「ます形」中心派の代表は海外技術者研修協会の『みんなの日本語』(1998)である。両派の違いは、一見「辞書形」と「て形」の導入順序の違いのように見えるかもしれないが、本来の「ます形」中心派は、たとえ「辞書形」が「て形」の前に導入されていても、「辞書形」から「て形」を作るとすることはしないということに注意しなければならない¹⁸³。

2. それぞれの立場には各々言い分があると思われるが、それを明白に述べているものはあまりないようである。以下では、「辞書形」中心派の先鋒、菊池(1999)の議論を検討することにする。菊池の論点は、次の6つである。

(3) a. 「て形」のほうが「辞書形」より使用頻度や機能の面で“重要度”が高いという議論があるが、その差はわずかで、「この機能・頻度の差以上に大事な観点があれば、そちらを重視すべきである。」(1999:46)

b. 中級・上級を目指す学習者は、辞書をひく上からも「辞書形」中心の学習が望ましい。動詞を「辞書形」を基にとらえるこの習慣は、日本語母語話者の思考法であり、「学習者の思考法を、日本語を母語とする者の思考法に、できるだけ近づけさせようとする——は、[日本語]教授者の基本姿勢として、心がけるべきである。」(1999:47)

c. 動詞のグループ分けに関する二つの判別法——藤村(1998)の用語を使えば、「辞書形」法と「ます形」法——には、それぞれ例外が存在するが、その数にほとんど差が見られないので、わざわざ「ます形」中心の立場をとらなければならない積極的理由はない。

d. 動詞分類判別法の“例外”の性質が異なる。「辞書形」法での例外は、ラ行五段の一部に限られるが、「ます形」法の例外は、いわゆる上一段動詞すべてである。動詞の一種類を全て例外としなければならない「ます形」法は「いかにも全うではな」(1999:48)く、それ故に、それを基本にする「ます形」中心派の立場が自然だとは思えない。

- e. たとえ「ます形」中心派の立場をとって「て形」を「ます形」から作る方法を学習者が教わっても、その学習者はいずれ「辞書形」中心の学習にならざるを得ない。それなのに、学習者は「ます形」法の例外をまず学び、その後に性質の異なる「辞書形」法での例外を学ぶとなると、頭の整理が大変であろう。
- f. 要するに、「ます形」中心派の立場は、初級レベルでは取りうるが、これは一時期の便法であり、中級レベル以上を目指す学習者に対して取るべき立場ではない。「正道」(1999:48)は、あくまで「辞書形」中心である。

まず(3a)から見てみよう。菊池も認めているように、確かに「辞書形」を必要とする文型と「て形」を必要とする文型を比べた場合、後者のほうが機能・頻度の点で"重要度"は高そうである。

(4) a. 「辞書形」を必要とする文型例:

- ①～のが好きです、②～でしょう、③～んです、④～と思います、⑤連体修飾節、
⑥～ことができます、⑦～前、⑧～かどうか

b. 「て形」を必要とする文型例:

- ①～ください、②～います、③～、…(「て形」による文の連結用法)

とすれば、教科書作成者が「て形」を「辞書形」より先に提出する理由にはなり得るだろう。ただ、それが即「ます形」中心派の立場を支持する根拠になるわけでもないことに注意しなければならない。なぜなら、今ここで問題にしているのは、本文に現れる文型であって、本文とは直接関係なく「辞書形」の形だけを日本語の文体という枠組みの中で導入することは可能だからである。この場合、「辞書形」を「て形」の前に説明導入することに問題があるわけではない。(3b)について言えば、私たちが「辞書形」を基に動詞をとらえているのは内省してみると、確かなように思われるが、だからといって学習者がそうあるべきだという結論にはならない。学習者が母語話者と同じ思考法をもたなければならないという根拠は不明瞭だからである。(3c)の動詞分類判別法については前に藤村(1998)で取りあげた。簡単にまとめると、次のようになる。

(5) a. 「辞書形」法:

- ①「辞書形」が「る」で終わらない動詞は、すべて五段動詞である。
②「辞書形」が「る」で終わる動詞のうち、「る」の前の音節が「あ/う/お」の母音を含むものは、すべて五段動詞である。
③「辞書形」が「る」で終わる動詞のうち、「る」の前の音節が「い/え」の母音を含むものは、多く一段動詞であるが、五段動詞もある。この五段動詞が「辞書形」による動詞分類判別法の例外となる。

b. 「ます形」法:

- ①「ます形」の「ます」の前の音節に「え」の母音を含む動詞は、一段動詞である。

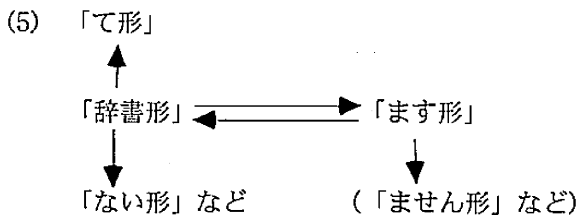
- ②「ます形」の「ます」の前の音節に「い」の母音を含む動詞は、大部分が五段動詞であるが、一段動詞も存在する。この一段動詞が「ます形」による動詞分類判別法の例外となる。

また、同論文では北原保雄編『日本語逆引き辞典』(1990)及び『日本語能力試験出題基準』(1994)の語彙リストを使用した両者の例外語比べが行われ、その結果例外語数が同じであることが判明し、この点だけでは両者の優劣はつけ難いことが報告された。今回新たに『品詞別・A～Dレベル別1万語語彙分類表』(改訂版1998)を用い、例外例を再度調査してみた。その結果は、「～する」動詞を除く動詞1535語のうち、「辞書形」法の例外となる五段動詞の数と「ます形」法の例外となる一段動詞の数が、それぞれ57と60となり、前回の調査同様ほぼ同数となった。但し、この数には広辞苑(第5版)で同一語彙として扱われているものが別々に数えられているので、今これらを一語として数え直すと、それぞれの例外数は56と55となり、数の多寡は逆転するが、やはりほぼ同数であることに変わりはないことが判明した¹²⁴。このことは、「辞書形」法の立場を取るにしろ、「ます形」法の立場を取るにしろ、その優劣をそれぞれの例外数の多少で争うことはできないということを示している。(3d)では例外の性格を吟味しているが、例外の性格がよくないから規則が悪いと言えるのは、同じ現象を記述する二つの規則を比べる場合であって、別々の現象を記述する規則に現れる例外の性格を比べ、一方の規則が他方よりいいと言うのは無意味である。(3e)について述べば、確かに中級・上級レベルになれば「辞書形」中心の学習になることが多いであろう。それは、読み書きの比率が初級に比べ多くなり、「辞書形」を見たり書いたりする機会が増えるからだと思われる。ただ、だからと言って「ます形」法が不必要ということにはならないだろう。同様の議論が(3f)にも言える。

3. 「辞書形」中心派の代表として菊池(1999)の議論を検討してきたので、次は「ます形」中心派の検討になるわけであるが、菊池の議論は実は「ます形」中心派(少なくとも「て形」導入に関しては)の野田(1995)への反論として書かれたものである。従って、ここでは「ます形」中心派の検討は省き、筆者自身の考えを述べたいと思う。

菊池にも野田(1986)(残念ながら野田(1995)は未見)にも一番大事な視点が欠けているように思える。それは、「ます形」は「丁寧動詞」とでも呼ぶべき動詞の一形式であり、「辞書形」は「普通動詞」¹²⁵とでも呼ぶべき動詞の一形式であるという視点である。種類が違う動詞の変化形について議論するのがそもそもおかしいのである。「て形」は、「普通動詞」に属する変化形であるから、当然「辞書形」と関連はあるが、「丁寧動詞」の一変化形である「ます形」とは関係がない。このように考えれば、「辞書形」中心派の立場が正当であるのは明らかである。故に、菊池の結論には賛成するが、上記の視点を欠くその議論には同意し兼ねるところが多いのは(3)のコメントとして上に述べた通りである。「辞書形」中心派に対する問題点は、(3a)でも問題になった、「辞書形」と「て形」を比べた場合、「て形」を用い

る文型を「辞書形」が使われる文型より先に教えたいと考える日本語教師が少なからず存在するという事実である。この問題には、形だけの「辞書形」を「て形」の導入前に教えておくという手で解決できる。これなら「辞書形」が使われる文型の導入まで待たずに「て形」の形を「辞書形」から作らせることができるからである。ただし、これが「て形」の形を導入するためだけのものであってはならない。「辞書形」の導入は、日本語における文体（つまり「です/ます体」と「普通体」）の違いを説明するというコンテキストで行われるべきである。なぜ教科書の会話が「です/ます体」なのかもこの時説明するとよい。「です/ます体」が例文会話に使われるのには、それが「普通体」より使用できる場面が多いという言語使用上の理由だけではなく、文法上の理由があるからである。それは、「丁寧動詞」の「変化形」と「普通動詞」のそれを比較してみれば明らかである。学習者にとって、「ます形」と「～ません/ました/ませんでした」の語尾を覚えるだけで全ての動詞が使いこなせるようになるのだから、教科書の会話が「です/ます体」で始まるのは、当然であろう。形だけの「辞書形」導入法をとっている教科書として関西外国語大学の『げんき』（1999）があるが、残念ながら文体の説明はない¹⁶。文体の違いの説明というコンテキストで「辞書形」の導入が行われているのに国際大学の Japanese for IUJ Students（学内版）（1999/2000）がある。次に、「辞書形」法と「ます形」法の優劣の問題であるが、これはそれぞれ別の種類の動詞（つまり「普通動詞」と「丁寧動詞」）に関する規則の問題であるから、ここで優劣をつけることはできない。どちらの規則も学習者は知っておくことが望ましいと思われる。では、最後に「辞書形」と「ます形」の関係は、どのようにとらえるべきなのだろうか。「辞書形」と「て形」「ない形」などとの関係を縦の関係とすれば、「辞書形」と「ます形」の関係は横の関係ととらえるべきものである。つまり、前者と後者の関係は、異質なもののなのである。両者の関係を図式化すれば次のようになるであろう。



これを「～形」という呼び名が付いているために、すべて同じレベルのものだと考えたところに大きな間違いがあったのである。見せかけの名称に惑わされ、根本的な点が見過ごされてきたことが悔やまれる。

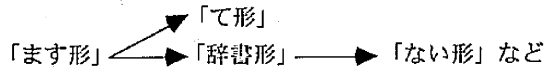
* 忙しい中で本稿の原稿を読んで貴重なコメントをくださった同僚の田丸淑子氏に感謝したい。但し、内容に関する責任が筆者にあることは、言うまでもないことである。

1. 意見が一致する必要はないと考える人もいるであろう。ただ、学習者は学習機関を変えることが多いので、その都度、別の方式に慣れなければならないのは大変なことであろう。この点で基本的な導入法が定まっていでもいいのではないかと考える。

話は少々わき道に逸れるが、教科書間の用語の不統一も学習者にとっては厄介な問題である。たとえば、動詞は、不規則動詞のほかに、教科書によって、一段動詞・五段動詞とか、ru動詞・u動詞などと呼ばれる動詞に下位分類される。全く同じ内容を指し示す言葉が教科書によって異なるのは学習者にとってやはり不親切であろう。用語を統一したらいいと思うのは、筆者だけだろうか。

2. 実際には、これらの2種類の他に中間派とでも呼ぶべき次のような派がある。本文の(2)に従って図式化すれば、以下ようになる。

(2c) 中間派:



ただし、「て形」の導入に関しては「ます形」派なので、一応これも「ます形」派と見なすこととする。早稲田大学国際部の Total Japanese (1994) がこれに属している。

3. 上記の注2で述べたように、中間派も「ます形」派として扱い、本稿では区別していないが、本来の「ます形」派はここで述べたように強い主張をしているのである。但し、これは「辞書形」が「て形」より前に導入された教科書の場合であって、この派の代表としてあげた『みんなの日本語』がそのような教科書であることを言っているわけではない。この教科書では、「辞書形」は「て形」の後に導入されている。勿論、「辞書形」の後に導入される他の形(たとえば、「ない形」など)は、この教科書でも「辞書形」ではなく「ます形」から作られることは、言うまでもない。

4. 「辞書形」法の例外例の中には「混じる」と「交じる」が含まれ、「ます形」法の例外例の中には「できる(可能)」と「できる(完成)」、「降りる」と「下りる」、「省みる」と「顧みる」、「染みる」と「滲みる」、「伸びる」と「延びる」の8語が含まれている。また、それぞれの例外例の中には、同じ語尾を持つ語も多数含まれている。「辞書形」法の例外例には「～切る」「～返る」で終わる語がそれぞれ12語と3語含まれているのに対して、「ます形」法の例外例には「音読み漢字+じる」の形をとる語(たとえば、「信じる」、「禁じる」など)が15例も含まれている。後者には「漢字+びる」の形をとる語(たとえば、「錆びる」、「延びる」など)も多く、8例を数えている。これらの語をそれぞれ一語で代表させると、「辞書形」法の例外は43例、「ます形」法の例外は34例となり、後者の例外の少なさが目立つ。ただ、この『品詞別・A～Dレベル別1万語語彙分類表』には入っていないが、若者言葉「びびる」は「辞書形」法の例外で、「ます形」法の例外としてあげた「漢字+びる」と語尾が類似しているので、「漢字+びる」形はそれぞれ一語として扱われるべきだという議論も成り立つかもしれない。そうすると、「辞書形」法と「ます形」法の例外数は、43対42となり、やはりほぼ同数ということになる。

5. 「食べる」に関する動詞を例にとれば、「食べる」は一般原形普通動詞で、「食べさせる」などは派生された一般普通動詞という意味で、一般派生普通動詞と呼ぶ。これに対して、「めしあがる」と「お召し上がりになる」はそれぞれ特殊原形普通動詞と特殊派生普通動詞と呼べよう。ここで大切なことは、これらの動詞がすべて普通動詞で、「丁寧動詞」ではない点である。

6. 『げんきⅠ』(1999:58-59)では、「辞書形」が「ます形」と同時に文法項目として導入され、学習者は、動詞のグループ分けを知る上から、動詞の形として両形を一緒に覚えることが要求されている。ただ、「辞書形」が本文会話に実際に登場するのは、「て形」の導入よりもずっとあとである。

参考文献

- 坂野永理・大野裕他 (1999) 『げんき I-II』 The Japan Times
- 藤村泰司 (1998) 「日本語教育で『辞書形』を『活用』の中心に据えるのは、なぜなのか」
Working Papers on Language Acquisition and Education 9: 40-44, 国際大学
- Fujimura, Taiji, Yoko Kato et al. (1999/2000) *Japanese for IUJ Students* (学内版),
国際大学
- 海外技術者研修協会編 (1998) 『みんなの日本語 I-II』 スリーエーネットワーク
- 菊池康人 (1989) 「日本語教科書の作成と言語学」『言語理論と日本語教育の相互活性化
予稿集』 113-122.
- 菊池康人 (1994) 「日本語教科書の作成と言語学——あわせて、動詞の活用のとりあげ方について——」『東京大学留学生センター紀要』 4: 17-40, 東京大学留学生センター
- 菊池康人 (1999) 「動詞の活用をどう教えるか——日本語教授者のための知識・教授方針の
整理——」『東京大学留学生センター紀要』 9: 29-53, 東京大学留学生センター
- 北原保雄編 (1990) 『日本語逆引き辞典』 大修館書店
- 国際基督教大学 (1996) *Japanese for College Students: Basic 1-3*, 講談社インターナショナル
- 「日本語学力テスト」運営委員会 (1998) 『品詞別・A～Dレベル別 1万語語彙分類表』
(改訂版) 専門教育出版
- 野田尚史 (1986) 「日本語教科書における文型の扱い」『日本語教育』 59: 48-61.
- 野田尚史 (1995) 「日本語教育のための日本語文法」日本語教育学会第11回日本語教育
集中研修会講義資料. [未見。但し、菊池(1999)に紹介あり。]
- 岡野喜美子・長谷川ユリ他 (1994) *Total Japanese: Grammar and Conversation Notes*,
早稲田大学
- 筑波ランゲージグループ (1991) *Situational Functional Japanese 1-3*, 凡人社